疎外された近代人の諸相

——ケラーの「ゼルトヴィラの人々」のリアリズムの一考察——

中　野　和　朗

「人間が彼の労働の生産物から，彼の生活活動から，彼の類的本質から疎外されているということの一つの直接的帰結は，人間からの人間の疎外である。」（マルクス「経済学・哲学手稿」より）

(一)

どこから眺めても何の変哲もない，むしろ外面は立派に見えるが，実は人間を人間たらしめるもの，人間の類的本質ともいうべきものを喪失した人間をわれわれの身近に見ることは近来ますます珍しいことではなくなっている。彼は決して病人ではない。それどころか活力溢れた有能な人間でさえある。かれは，かれの時代に合致した才能をより多く持ちあわせたことによって何よりもまず商売人としてあるいは能吏として，今日の商品社会，官僚社会の中で栄冠を手中にしさえする。にもかかわらず彼は病める者だ。頭上に燦（サン）たる栄冠こそ紛れもなくかれが，何人をも容赦せぬ病める時代の病める者の証しである。つまり，彼は疎外の時代の落し児として，疎外された人間の典型として現われているのである。

アダム・スミスのことばをかりれば「全体が一つの商業社会であり，その成員は誰でも商人である」ような社会，商品生産がその経済生活の土台となっていて，それが一般的な様式となり，人間の経済的な活動や過程がすべてそれを中心とするような社会，しかもその主要な特質である交換価値が，もはやたんに経済的な事柄だけにとどまらず，至高の価値と見なされて人間存在の全体を規定してしまうような社会の中から必然的に産みだされるのがこのもはや決して珍らしくはない畸型児といえる。

私的所有，分業，商品生産と流通などを体制とする社会では，本来自己実現活動であるべき労働は疎外される。「個々人と，生産諸力および個々人の本来の生存とを，いまなお連ねている唯一の連関，すなわち労働は，彼らのもとでは自己実現活動というあらゆる外観を失ってしまい，ただ彼らの生活を不具にすることによってのみ，その生活を維持するにすぎないもの」（マルクス＝エンゲルス「ドイツイデオロギー」「全集」第3巻67ページ）となってしまっている。このように疎外された労働は，「人間の類的本質を，すなわち自然をも人間の精神的な類的能力をも，彼にとって疎遠な本質とし，彼の個人的生存の手段としてしまう。疎外された労働は，人間から彼自身の身体を，同様に彼の外にある自然を，また彼の精神的本質を，要するに彼の人間的本質を疎外する。

人間が彼の労働の生産物から，彼の生活活動から，彼の類的本質から，疎外されている，ということから生ずる直接の帰結の一つは，人間からの人間の疎外である。人間が自分自身と対立する場合，他の人間が彼と対立しているのである。人間が自分の労働にたいする，自

分の労働の生産物にたいする，自分自身にたいする関係について妥当することは，人間が他の人間にたいする関係についても，人間が他の人間の労働および労働の対象にたいする関係についても妥当する。

一般に，人間の類的本質が人間から疎外されているという命題は，ある人間が他の人間から，またこれらの各人が人間的本質から疎外されているということを意味している」（マルクス「1844年の経済学・哲学手稿」「全集」第40巻517～518ページ）

このような疎外の状況はますます進行し，個々の人間の全存在，あらゆる人間関係の中に容赦なく浸透している。したがってその中にどっぷり浸けられているうちに疎外状況そのものが，日常茶飯の馴じみ深いものとなり，いつのまにかそれが本来のものと思われるようになり，人間社会の発展の過程の中で現われた現象ではなく，アプリオーリーな不変のものという一般的な認識が市民権を得たりもするのである。

騒音の中でしか生きることのできない耳には，騒音がノーマルなもの，本来的な自然なものとなり，騒音から解放された状況が異常なものとなる。そのような耳に，騒音が異常だという認識が得がたいのと同様に，疎外状況の中に埋没した疎外された人間にとって，疎外状況を自ずから認識することは難かしい。

しかし「細目の真実のほかに，典型的環境のもとにおける典型的人物（キャラクター）の忠実な再生産」（エンゲルス；マーガレット・ハークネス宛1888月4月初，「全集」第37巻42ページ）を可能とする勝れたリアリズムの文学は，われわれに認識困難な現実と真実を忠実に映しだす鏡である。

（二）

バルザックやトルストイと同等に，19世紀の偉大なリアリズム文学の作家と評価される，ドイツ語で書いたスイスの作家，ゴットフリート・ケラーは，たしかに「典型的環境のもとにおける典型的人物（キャラクター）」を再生産することができた。

とりわけ短編集「ゼルトヴィラの人々」は，資本主義の勃興期にあるスイスのどこかにある美しい森と田園にかこまれた古い田舎町，ゼルトヴィラにおこったさまざまな風変りな出来事と，それにかかわる人間像を見事に悲喜劇として描いたものであり，この短篇集はまさしく，疎外された近代人の諸相を明確に映し出している鏡というにふさわしい作品集であるといえよう。

第二巻の序文でケラーはこう書いている。「――現実のゼルトヴィラについては，これまで数百年を通じて変ることのなかった（町の）性格が十年そこそこのあいだに変ってしまい，全く正反対のものにされてしまいそうなほどの変化が起った。もしくは，もっとありていにいえば，ひとびとの生活は，しっかり者のゼルトヴィラの人びとの特別な才能とむらっ気がその中で一層見事に発揮でき，まさにかれらがそこでは親方である恰好な領域，ありがたい畑地を併せもち，それらによって功をなし悦に入っている，やり手のよそのひとびとと少しもかわらないひとびとになるほどになった。

とりわけ，ゼルトヴィラのひとびとに，ずっと昔からかれらのためにそなわっていたように思われ，かれらをたちまち何千人もの熱心な商売人と同様にした分野を開いたのは，いたる処に拡まった有名無名の有価証券の投機熱である。

相場の小田原評定，てんやわんやの騒ぎをしたり，電報を開いたりうったりといったこと

で日が暮れる，無数のその種の事がら以外には何の仕事もかかわりのない商売を推進するためにほっつき歩くこと，かれらのやることといえばそんなことしかない。——(中略)——

かれらは以前はしわくちゃの借用証や小額の手形の入ったぶ厚い財布をもち歩いたが，その代りに今はエレガントな小手帳をもち歩き，その中には株や債券，綿とか絹の注文が書きこまれている。——(中略)——かれらは常に活動しており，各界とコンタクトを持っている。かれらは最も有力な実業家たちとトランプをし，勝負のあいだに商売上の問題にさり気なく返事を与えることとか意味深の沈黙を観察することを抜け目なくのみこんでいる。だが，かれらはそんなことをしているうちにいつのまにか一層そっけなくドライになってしまった。かれらは以前ほど笑わなくなりお茶目な悪戯や気晴らしを考える暇がほとんどない。

すでに何がしかの財産があちこちに次第に貯まり始めたが，それは商業恐慌が起るとポプラの葉のように震え，あるいは違法な集会に警察の手が入る時のように人目にさえつかず再び相互に売られるのであった。

かれらは政治はきまって戦争騒ぎをおこすと信じているのでほとんど全く政治から遠ざかってしまった——(中略)——かくして以前はもっとも熱心な飲み屋の政談家であったかれらが，びくびくして政治的な事柄についてどんな意味もひかえるようなことになってしまった。——(中略)——

しかしまさしくこのようなことすべてによってゼルトヴィラのひとびとの本質は変化してしまった。すでに述べたようにかれらは他のひとびとと変りなくなってしまった。かれらの間にはじっくり眺めて書きとめておく値打のありそうな事は何もおこらなくなってしまった——(後略)——」(「ケラー全集」アウフバウ版 1958 第6巻 289ページ～)

「ゼルトヴィラの人々」第一巻は1856年，第二巻は1874年に出版されているが，ケラーは以上の序文の内容からすでに明かなように，19世紀に入ってヨーロッパを包んで目を見はる勢で勃興し発展した資本主義の波が，スイスの美しい古い田舎町にも押し寄せて，古き良き時代の遺物をさらい奪り，人間と生活を容赦なく変えていくその様相を，リアリストの眼で観察し，あますところなくその諸短篇の中に再現させたのである。

以下「ゼルトヴィラの人々」の個々の作品を，疎外された人間と疎外様相に視点をすえて観察してみたい。

(三)

「およそ人から金を借りたこともなければ，人に貸したままにしておくこともない。人を苦しめたことがないかわりに，人から愛されたこともない。働いたり儲けたりはするが，一文たりとも金は払いたくない。せっせと働くことによって利益だけは得るが，仕事に喜びを感じようとしない」，こんなまっとうな三人の櫛職人の愚しくも哀れな葛藤を描いているのが「三人の律義な櫛職人」である。ケラー自身は，1857年7月5日附のルトミラ・アシング宛の手紙によると，この短篇集を構成している10の作品の中で，この作品が一番気に入っていたというが，なるほどこの作品は他のどの作品よりよりするどく疎外された近代人の姿を活写しているといえよう。冒頭の三人の主人公達の性格規定そのものがすでに「一般に，人間の類的存在が人間から疎外されているという命題は，ある人間が他の人間から，またこれらの各人が人間的本質から疎外されているということを，意味している。」(マルクス「1844年の経済学・哲学手稿」「全集」第40巻

518ページ）という命題の文学における適格な表現だとさえいえる。

かれらは「どんな職業にでもつくが，危険さえ伴わなければどの仕事も同じこと」（傍点は筆者）なのだと説明が加えられているが，これはもはや自己実現の活動ではなくなってしまい単なる肉体的生存の手段でしかなくなってしまった疎外された労働を表している。

ゼルトヴィラの櫛作りの店へやってきた最初の男は，ザクセン出身のヨープストである。彼は「真面目でおとなしい職人」で「どんなことでも云うなりになってまるで牛馬のようによく働」く男であった。彼は「寝台にぴんと身を伸ばして横たわり」「塩漬けキャベツを喜んで魚だといって食べ，春になれば一片のハムを恭々しく礼を云って食べた。」「彼は一文も使わず，残らず貯めこんでいた。」「日曜日もふだんと変わりなく昼過ぎまで働いた。」しかし彼は決して「にこにこと満足そうにこの仕事をしたと考えてはいけない。むしろ彼はみずから進んで骨を折りながら意気消沈して，たえず暮しのつらさをぶつぶつ云っていた。」さらにその仕事ぶりはといえば，「味もそっけもなく，想像力を欠いていたので，いつも同じ面白味のない斑点を三つなすりつけるだけ」で「細工に多少とも工夫をこらす」などという気のきいたことなど決してやらないという有様であった。もはや全く疑いの余地はない。われらの主人公ヨープストにとって櫛作りは，もはやかつて職人が生命がけで魂を込めてうちこんだ仕事なんかではなくただ単なる財産形成になり下った賃労働でしかない。ここに見てとれるのは賃金奴隷への転落に甘んじねばならぬ現代の賃金労働者の原型ではなかろうか。

マルクスによるとこうである。「労働が労働者にとって外的であること，すなわち，労働が労働者の本質に属していないこと，そのため彼は自分の労働において肯定されないでかえって否定され，幸福と感ぜずにかえって不幸を感じ，自由な肉体的および精神的エネルギーがまったく発展させられずに，かえって彼の肉体は消耗し，彼の精神は頽廃化する。それゆえそれは何かの必要を満足させることなのではなくて，その労働の外にある諸必要を満足させるための一つの手段であるにすぎない。」（マルクス「1844年経済学・哲学手稿」第40巻「全集」514ページ）ヨープストは，こうして働きながらひそかに「大計画」を企てていた。それは「いつの日か店の持ち主がいなくなるときに店を買い取れる額になるまで賃金を貯めこんで，その暁にはみずから店の持ち主となり親方となってやろう」というのであった。かれの行動を根底で支えたのはこの計画であった。かれは「自分の幸福を増大しないものには少しも頓着せず，一文たりとも無駄遣いせぬが，この町の軽薄な風潮に乗じてできるだけうんと金儲けをしてやろう」と考えていた。しかもかれは，現代人と同じハイマートローザーであった。かれは「ゼルトヴィラへの愛着もなかったし，またこの土地に対しても，あるいはこの土地の政治組織に対しても，あるいはここの風習に対すしも彼は少しも愛情をもたなかった。それらはみな彼にとっては，彼がちっとも帰りたいと思っていない自分の故郷と同様にどうでもよかったのだ。世界中のどこででも彼は孜々営々と律義ぶりを発揮してここ同様に住みつくことができた」からである。おどろくべきことにケラーは，ヨープストの様な律義者が特殊例外的なものでなく世界中どこにでもいるのだとつけ加えてこうつづけている。「彼らは偶然によい暮し向きの吸い口にぶつかったばかりにその土地に引きこもってしまったので，彼らは古い土地への郷愁も，新しい土地への愛情もなく，広い世間を見るでもなく，近辺を見物するでもなく，黙々とその吸い口から吸っているのだ。したがって自由な人間というよりは，むしろ空気と水によって運ばれて偶然たどりついた場所で生長する下等な生物，奇妙な動物や植物の種子に似ていた。」

詩人の叙述としてはいささか説明が直截で過剰という感じがしないわけではないが，しかしヨープストの様な人間を「下等な生物」や「植物の種子」になぞらえているのはけだし傑作で，疎外された労働により類を疎外された人間の描写としてはどんぴしゃりである。

マルクスをひきあいにだせばこういうことになる。

「人間（労働者）は，ただわずかに彼の動物的な諸機能，食うこと，飲むこと，産むこと，さらにせいぜい，住むことや着ることなどにおいてのみ，自発的に行動していると感ずるにすぎず，そしてその人間的な諸機能においては，ただもう動物としてのみ自分を感ずるということである。動物的なものが人間的なものとなり，人間的なものが動物的なものとなるのだ。食うこと，飲むこと，産むこと，等々は，なるほど真に人間的な諸機能ではある。しかし，それらを人間的活動のその他の領域からひきはなして，最後の，唯一の究極目的にしてしまうような抽象がされるところでは，それらは動物的である。」（マルクス「1844年経済学・哲学手稿」「全集」第40巻・514～515ページ）

さて，やがてヨープストの外にバイエルン人のフリドリーンが加わる。

かれらは「幾時間か経（た）ってみると，２人とも相手が自分と全く瓜二（うりふた）つの男であることを知」るのである。そして「ちょうど２人の屈強な武士が，果し合いをする前に，武士らしく申し合せをして互いに切磋琢磨しているような」様子であった。

ものの１週間とたたぬ内にシュワーベン人のディートリヒが仲間に加わる。

このディートリヒも他の二人と何ら異るところのない同類であった。

「三人はあたかも正三角形の３つの頂点のように一様に相対峙していて，二者の間にうちとけた関係が生じえなかったし，休戦状態も礼儀正しい競争も不可能だったので，彼らは大真面目で働き，互いに相手をベッドと家から追い払ってしまうまで辛抱し通そうと思った」（傍点は筆者）のである。こうして３人の同好の士の奇妙な生活，陰湿な血みどろの競争を基本とする生活がくりひろげられる。この３人がつくる人間関係にはもはや人間的・同胞的な靭帯は失われている。「自由競争」と「弱肉強食」の倫理が貫徹されている「自由主義社会」の，「私的所有」のあくなき追求のためには，人間同士が打倒すべき敵となってしまうすさまじい人間模様の縮図がそこにみられる。

筋立てとしてここに彼らの雇い主である親方が登場してくる。

親方は「この３人の変り者がここに居残るためには何でも喜んで引き受けるのを見て，彼らの賃金を削り，食事も減らした。しかし職人たちはますます働く一方で，親方はおかげで安い品をどっさり市場に出して，増加した注文に応ずることができた。すなわち物静かな職人たちによって巨額の金を儲けた。まさにこの職人たちは親方の金蔓であった。」（傍点は筆者）そのあげく親方は「バンドを穴３つ４つほどゆるめ，町の顔役になった。」

ここにも，労働者が「より多くかせごうとすればするほど，ますます多く自分の時間を犠牲にし，一切の自由を完全に放棄して貪欲に奉仕するための奴隷労働をやりとげねばならない」（マルクス「1844年経済学・哲学手稿」「全集」第40巻473ページ）法則とか「労働者の生産物のますます多くの部分が彼の手から奪いとられ，労働者自身の労働が他人の所有物としてますます彼に対抗するようになり，そして労働者の生存と活動とのための諸手段が，ますます資本家の手中に集中されることによってのみ可能な」（マルクス「1844年経済学・哲学手稿」「全集」第40巻473ページ）資本蓄積の原理といったものが看てとれる。

この愚しく醜悪な，しかし人間を疎外する社会での法則に叶った競争の中で，一番若く，貯えも一番少いシュワーベン人のディートリヒは，勝利者となるために，一定の資産をもったゼルトヴィラの女性と結婚することを思いつく。彼にとって結婚は，愛情の前提など全く

無視されている。彼の結婚の相手は人間ではなく，相手が所有している資産である。

彼が白羽の矢をたてたのは，洗濯女の娘チュス・ビュンツリンである。父の遺産として700グルデンの債券をもった28才の「心のねじけた美人」である。ディートリヒに目をつけられるだけのことはあった。彼女の方でも日頃この変り者の櫛職人たちに好奇の目を向けていたからである。ヨープストは，この事実を知るや「女なんてものは男が支払う義務のないものを男から奪おうとするもの」だという信念からおよそ婦人になど興味をよせたことがなかったが，にわかにチュスに果敢にも近づいていく。まけてはならじとフリドリーンも加わって，今度は700グルデンをめぐって，1人の婦人の獲得競争が始まったのである。ところがこのチュスなる女性は，抜け目のないしたたかな人物で，親方と同じやり口を心得ており，3人の競争者たちを人形を操るように思いのままに操る。

チュスにまつわる純情な印刷工のエピソードや，3人の競争者に対する態度から，チュスはケラーが描く女性のタイプの一つで，「ディーテゲン」のヴィオランテ，「幸運の鍛冶屋」のリトムライ夫人，「仔猫シュピーゲル」の女主人等々と同列の人物像といえよう。

才気もありなかなかのやり手でありながらひたむきに彼女に想いを寄せる製本工の真心など理解できない女であり「もうかなり前から3人の櫛職人の生活をほめそやしていて，彼らを3人の律義で分別のある人たち」と呼んでいるような女性である。彼女もやはり疎外された人間の一人である。

欲に目のくもった3人の求愛者たちは，「互いに従順と謙遜と分別，お姫様の命令どおりになり，利己心なしに姫を讃美するという雅(みや)びやかな術を競い合い，4人が一堂に会すると，それはまるで奇妙な呪文がとなえられるふしぎな密儀にも似ていた。」そして「彼らは貧寒な心の持ち主ではあったが，いったん一人の女が中にはいってからは，嫉妬，心配，恐怖，希望の異常な昂奮の生ずるのをどうすることもできなかった。彼らは，労働と倹約でほとんど心身をすり減らし，目に見えてやせ細った。」

ところがある朝青天の霹靂(へきれき)がやってくる。親方が3人のうちの2人を解雇したいと申し渡したのである。彼らが競って身を粉にして働いたので製品のストックが十分となったのと，親方が儲けを過信して遊興にうつつを抜かし借財を作ってしまったための窮余の策であった。それをきいて，夫々大計画を胸に秘めている3人は，いよいよその目標が近づいたと考え自分だけはここにとどまりたいと自己主張の争いを始めるのである。

自己の利益だけを追い求めるため何もみえなくなり，内輪もめばかりして，存分に美味い汗をしぼりとられ，あげくの果にぽいと巷に投げ出される賃金労働者の基本的な運命，こつこつと真面目に働きさえすれば下づみの生活からは一挙に成り上れるという幻想をばらまき，それを餌に労働者を操作し搾取する弱肉強食を基本とする「自由競争社会」の原理が，この社会の片隅の小社会の描写の中にあますところなくあばき出されているといえる。

そこで親方は，「彼らをからかってやろうと思って，事態を解決するおもしろい方法を突然に提案した。」それは，「おまえたちの誰がでてゆくかについて何としても意見が一致せぬというのなら，それを決める方法をおしえてやろう。――おまえたちはたっぷり半時間ばかり郊外へ出てゆくのだ。――それからまた町へ戻ってくるのだ。そして真先にわしのところに来て仕事をたのんだ者がここに残ることにする。ほかの2人は否応なしにどこへなと好きなところへ出てゆくのだ。」というのである。

これは相互に争わせて分断して管理する悪らつな経営者の常套手段のもっとも素朴な原型

といえる。

チュスもこの茶番劇に加わり抜け目なくたちまわり哀れにも滑稽な3人の櫛職人を手玉にとり茶番を盛りあげる。

3人の斗争者たちはゼルトヴィラ中のひとびとの好奇心にあふれた注視の中でくんずほぐれつ必死にぶざまな競争を実演した。

茶番劇は，律儀な3人の櫛職人たちの3人3様の悲劇的な結末で終っている。

ヨープストはすっかり正気を失ってしまい郊外で木に首をつってしまい，バイエルン人はそれを見てすっかり人が変ってしまい，世間から相手にされぬ人間となった。ディートリッヒはめでたくチュスと結ばれ，また目先のきく親方から借財と共に店を引きついだが，「しかしけっして楽しい暮しではなかった。なぜならチュスはてんで彼の名誉など認めず，すっかり亭主を尻に敷いて，自分だけがすべての善の源泉であると思いこんでいたからである。」

(四)

疎外された人間は，さまざまな装いをして現われる。

財力も勝れた技術も才能もなく，律儀な櫛職人達の様にせっぺせっぺと働いて貯めこむことにも興味を持たないが，いつかは運がひらけ，一発あてこんで成り上りたいと希っている人間たちもいる。彼らには，時として世間の目を瞞く不思議な才覚，貴公子然たる容姿が，天性のものとして備わっていたりする。「幸運の鍛冶屋」のジョン・カビス，「馬子にも衣装」のヴェンツェル・ストラピンスキィーは，こういう類の人間の完ぺきな典型として描き出されている。

やがて40に手がとどこうかという品よく見えるジョン・カビスは，「人は誰でも自分の運命の鍛冶屋でなければならぬ，そうなるべきだし，またそうなることができるのだ，しかもじたばた大騒ぎすることなしに」というのをゆるぎない信条としていた。「落ちついて，ただときどき名人芸の鎚をふるえばひとは自分の幸運を鍛えあげることができる」と確信している。

で，彼はどんな名人芸をふるったか？まず彼は年端のゆかぬ少年の頃呼び名のヨハネスをイギリス風のジョンにかえた。この狙いは「それによってそこらのミーちゃんハーちゃんとは類を異にするアングロサクソン人種のように進取の気性に富んだ人間らしい後光につつまれ，あらかじめ非凡なことや幸運への道を自分のために開いておくのがその目的だった。」彼はそうやって網を張り幸運がかかるのを待った。「たいして勉強もせず，また働きも」せず辛棒強く時期を待った。しかしその餌に幸運が食いつきそうもないので，彼は第二の名人芸をふるう。今度は姓のカビスの i を y にかえて，一層高尚な外国風の感じを持たせた。ところが待てど暮らせど幸運は訪れる気配がない。倹約に暮らしたが遂にわずかな財産は底をつき，今度は深刻にある計画を考えだした。

いつの頃からかゼルトヴィラには自分の名に女性の姓を添えて商会名をつくり，その名前で売り出し成功を収めようという妙な風習ができていた。「姓を長くすることは信用でもつ紳士社会のからくりのもっとも精密な歯車の一つであった」からである。

ジョン・カビスは，それにふさわしい名の女性を黙々として探し，遂にオリヴァ母娘を見

つける。カビス＝オリヴァ！この連名のひびきに彼はうっとりとする。「この商会名で小さな店を築けば数年ならずして豪家となるだろう」と幸運を確実につかむための準備をはじめる。彼が整えた七つ道具とは「金縁眼鏡，金鎖りでつないだ七宝のシャツボタン3個，花模様のチョッキに飾った，各種のペンダントを下げた長い時計鎖り，ブローチ，指輪，螺鈿の樽形の小さなオペラグラスになった握りをもつ大きな藤のステッキ」などであった。これらは彼にとっては幸運を握むことのできる男に不可欠の装身具であった。と同時に彼は，身のこなし立居振舞にも気を配った。

「彼は世間に対しても，自分に対してもおれは乞食同然だなどと思うどころか，どんな苦しいことをしのんでも生彩を失うことがなかった。同様に何ものも失わず，損(そこな)わず，破壊せず，混乱させぬために，たえず落着きと品位のある態度を」とった。

幸運の鍛冶屋の念入りな細工は効を奏しカビス＝オリヴァ商会の実現は目前のものとなった時オリヴァ嬢は実は，オリヴァ未亡人の私生児で戸籍上の姓はホイプトレであることが判った。これではジョン・カビス＝ホイプトレ！（ドイツ流ではハンス・コールケプレ，つまり「愚か者」「ばか」を意味する語の連名）となってしまう。ああ何たることか！しかしたくましい幸運の鍛冶屋はくじけずしからばと，母親のオリヴァ未亡人との結婚にきりかえようとする。彼にとって一番大切なのが彼女の名前であったことを知ってオリヴァ夫人は玄関払いをくわせたのである。

「かくしてジョン氏は輝かしき『オリヴァ』がきらきら輝くしゃぼん玉のように青空に消えてゆくのを見た」のである。財産の全てをはたいて名人芸をふるったにもかかわらず挫折したカビスは，その後しばらく床屋という現実的な仕事に甘んじたが，ドイツのアウグスブルクにカビス家の一族の一人が財をなして住んでおり，一族の消息をしりたがっているという話しを耳にしてたちまちその話しにとびつく。「よしこれからでもうんと幸運をつかんでやろう」と決意を固め，決して手離さなかった例の七つ道具を持って旅立つ。アダム・リトムライ，宮殿の様な邸に住む小柄の老人がその人であった。カビスはまんまとリトムライ老人を七つ道具の輝きで籠絡してしまう。そして今度こそは自から幸運を鍛え出し，リトムライ家の相続人となることができた。ところが事がそこまで順調に運んだ時，「ほとんどいつも眠っているか，起きている時はおいしいものを食べている」「かなりな美人」でまだ若い老人の三度目の夫人のことが気になりだした。「今突然に彼はこの婦人がたとえば夫の気持をかえさせるとか，何か彼に不利になるようなことを企みはせぬかと心配」になりだした。そこでカビス氏はまたもや名人芸をふるって最後の仕上げに打ちこんだのである。ジョンは「自分の地位を安泰にし，幸運をしっかり釘づけにしておく目的で，恩人に対する忘恩の情熱にふけった。」である。

老人のすすめに従ってリトムライ家の子孫のため各地の教育事情を視察する旅に出たジョンが，長い旅から戻ると何とリトムライ家はいまや奇蹟的な後継者の誕生にわきかえっていたのである。その結果は当然のなりゆきとしてジョンは廃嫡となりリトムライ家に無用の人間として無情にもつまみ出されてしまう。ハンマーをふるいすぎて自滅し「すっかり尾羽打ち枯らして」再びゼルトヴィラへ戻った幸運の鍛冶家は，その後は名人芸をふるってひとやまあてようという夢を棄て，町の片隅で一介の本物の腕ききの鍛冶屋となった。この短篇の終末には「おくればせに単純な倦(う)まぬ労働の幸福を覚えて，それは彼からあらゆる心配をとりのぞき，彼を悪い情熱から解放した。」と書かれている。

ここに描かれているのは，商品生産と，交換価値が至高の価値として人間存在を規定してしまう社会の中で，人間自身が商品化される現象のひとつのエピソードである。ジョンは通俗的な“ヤマ師”の典型であろう。交換価値を高めるために手のこんだ細工が加えられ，外見だけ磨きたてられた商品，チャラチャラした七つ道具で，高く売りつけようと自分自身を飾りたてる主人公のジョンはまさにこれらの商品と変りわない。今日われわれの身の周りにこの手の人間を見つけるのに苦労はない。さまざまな形をとってこの種の疎外現象は現われている。例えば，業績主義のとりことなって，真理探究の成果としてでなく，もっぱら点数稼ぎのために薬にも毒にもならぬ——だからますます有害無益である——論文の不毛な量産の奴隷となっている学者先生の姿などはまさにこれであろう。

ケラーは，商品社会の中で疎外された人間の生きざまを独特のフモールに包んで描ききっているといえる。

さて，ジョン・カビスと基本的には全く同類の人物であるが，写真のネガとポジの様なきわだったコントラストをみせて描かれているのが，「馬子にも衣裳」の主人公，ダンデイな仕立屋ヴェンツェル・ストラピンスキーである。

みずから積極的に売り込みを策したジョンと対照的に，ストラピンスキイーはみずからは特別なことは何もしないが結果的には，望外の幸運を握むことになる。つまり成行きにまかせているうちに向うからとんとん拍子で幸運がころがりこんでくるのである。

ゼルトヴィラの仕立屋の親方が破産し，仕事も賃金も失った仕立屋のストラピンスキイーは，一文無しではあったが「一張羅の黒い礼服の上に，ゆったりした鼠色のマントをはおっていて，それには黒いビロードの折返しがついており，着ている人を何か高尚でロマンチックな風采に見せていた。」「そのうえ，長い黒い髪と口髭とは念入りに手入れが届いていて，顔立ちは蒼白く，整っていた。」この身装りと容貌によって彼はゴルダッハの町のひとびとにポーランドの侯爵と思いこまれ，ついには知事の娘ネットヘンと婚約する。ところが陽気な謝肉祭のパーティで，かつての親方にでくわし，いったんは全てが露見してしまうのであるが，賢明なネットヘンの意志によりめでたく結婚し，ゼルトヴィラで洋服屋兼呉服商をひらく。「そのうち彼は肥って恰幅がよくなり，もはや夢想家らしく見えなくなった。年1年と商売上手になり，熟練し，——相場にも成功して，彼の財産は倍に殖え，12，3年後には，妻のネットヘンがうんだ大勢の子供といっしょに一家そろってゴルダッハに引っ越し，そこで名望家となった。」めでたしめでたしで終っている。

ケラーは，ストラピンスキーをジョンのポジ像として描いているといえるが，ストラピンスキーにも「たとえそれがただ衣服の選択であっても，自分を何か非凡な美しいものに見せたいという彼の生れつきの欲望」があったと書かれており，ジョンの様に意図的でないとはいえ，これがひとびとをまどわし，結果的には自分を高く売りつけることになっている。

「馬子にも衣裳」という題名はこの作品のテーマを適確にあらわしており，見せかけ，紛飾にほんろうされる大衆の疎外状況をも見事にとらえているといえる。

(五)

この短篇集1，2巻を通じて最後に置かれている作品「失われた笑い」には，1870年代にはすでにヨーロッパ全体をおおった資本主義勃興期の今日的な問題でもあるさまざまな弊害

が，素朴な民主々義の国スイスをも侵害し，それに対する良心派のケラーの告発と批判が鮮明に表出されている。拝金思想，投機欲，開発による自然破壊，さらには退敗した宗教問題などがもりこまれている。

主人公ユクンジー（ユクンドウス・マイエンタール）は，母ひとり子ひとりの，遺産で生計をたてている家庭の子である。他の作品の主人公が多かれ少かれ疎外された人間である中にあって彼はもっとも人間らしさを保持している人物として描かれている。しかし彼の婚約者ユスチーネ・グロールは，資産家の娘であり，この二人の出身階層の違いからくる生活信条，感覚の相違がかれらの結婚生活を破綻させることになる。

ユスチーネの母親は娘の結婚に当って「まだ誰も成功したものもなく，財産をもっているものもないゼルトヴィラの人を婿（むこ）にすることはできない」と考え，娘の恋を実らせまいとするが結局はそれを妨げることはできない。ユクンジーは結婚後材木商となる。資本主義の力が，貨幣の力が，古い価値あるものを侵害していく様子は，例えば次の様に描かれている。「どういう隙からか遂に誘惑と物慾とが忍び入り，広大な森の殿堂の中には，もう人知れず死神が歩き廻っていて，森の泉沿いにしのびやかに歩いては骨ばかりの指でなめらかな木の幹を叩いていた。――害悪も実は他国の商人達を通じてひそかに入ってきていたのである。」古くからの遺産である村の森はどんどん開発され荒廃していく。ユクンジーはそれに心を痛め「商売で相当な儲けがある一方，それはだんだんと恥ずべき事と思われ」るのである。そして記念碑的な一本の大樹さえも守ることができなかった時，彼は自責の念にさいなまれ石炭商に商売替えをする。ユクンドウスの心情には明らかにケラーの時流への抵抗と批判の精神が反映している。利潤追求のため金銭奴隷となることを拒否する人間としてユクンドウスは描かれる。「常に誠実を語り，他人の云うことも信じ」「長い云い争いをしたり値切ったりすることは我慢がならぬこと，卑しむべきこと」と考える人間が商人として破滅することは必定である。しかし，妻のユスチーヌは「貧乏を単にそれだけで，何か悪いこと，軽蔑すべきことの様に憎み蔑んだ」のである。だから，ユスチーヌは彼女の実家で，絹織業の実業家として夫を再起させようと努力するが，金に人間の魂を売り渡すことを拒否する人間が，商売で成功することはできない。ユクンジーは，妻の実家で「自分の本当の居場所」がないと感ずる。かくして彼等の家庭生活は崩壊する。そしてユクンジーは国民運動に，ユスチーヌは宗教的な慈善活動へと夫々別々の生活を始める。別れて活動する中で彼等は夫々に人間的な成長を遂げ，深められた愛を穫得し再び共同の生活に戻るのである。ユスチーヌの成長のために前提となったのはグロール家の経済恐流による破産であった。ケラーはこう書いている。

「大洋の彼方のあの恐るべき経済恐慌が全実業界に勃発して，いかにも鞏固に立っているかに見えたグロール家をも突然兇暴に震撼した」「男達は日夜青い顔をして静まり返って計算をしたり話しあったりした。そして家の秩序というものは痲痺したかに見えた。時計はねじのありたけ動いて止ってしまい，幾日もその儘になっていた後で，痛々しく悲しげに捲かれたのだった。」そしてユスチーヌは，信頼して止まぬ牧師が投機心にかられて，株を買い恐慌の波にほんろうされる姿を見て，確固たる信仰の基礎であった教会を失ってしまう。財産も信仰も失って動揺するユスチーヌは，ユクンジーの魂をはじめて理解し，彼らは再び互いに惹き合う愛の力で結び合わされるのである。

(六)

ケラー（1819～1890）は，文字通りマルクス（1818～1883）やエンゲルス（1817～1875）の同時代人であった。しかし彼にはマルクスやエンゲルスへの傾斜はなかった。だが以上みてきた通り「ゼルトヴィラのひとびと」の中には批判的リアリストとしてのケラーの面目が躍如としている。「最後に人類がこれまで譲渡不可能のものと考えていたあらゆるものが，交換すなわち取引の目的物となり，譲渡されうるようになった時代が到来した。それは以前には人に与えられこそすれけっして交換されず，贈与されたが決して売却されず，取得されたがけっして購売されることのなかったもの，すなわち，徳，愛，意志，科学，良心等々まで，つまりおよそありとあらゆるものが交易の目的物となるにいたった時代である。それは普遍的腐敗の時代，何事も金次第の時代である。経済学上のことばで云えば，精神的，物質的なありとあらゆる物が販売価値となり，もっとも正当な価値で値ぶみされるために市場にはこびゆかれる時代」（マルクス「哲学の貧困」「全集」第4巻69ページ）をケラーは，まさに資本主義社会の「放蕩息子」として現実を直視し，その内部から批判せずにはいられなかったのである。

ケラーの文学を基本的に特徴づけるものとして，ルカーチは，素朴なスイスのデモクラシーと，フォイエルバッハの哲学を挙げ，これが当時のドイツ文学が埋没していった郷土的，逃避的世界からケラーをへだてているとしている。これがケラーを「詩的リアリスト」ではなく「批判的リアリスト」たらしめている。

ケラーのリアリストとしての眼は，初期資本主義社会に現われた疎外された人間と疎外状況をするどく洞察し，しばしば独特のフモールによってそれを戯画化して描いている。そこからドイツ文学に他に類をみない愉快な文学の世界が創りだされている。

ケラーのスイスの素朴な民主々義と，フォイエルバッハの現世的人間主義に裏づけられたヒューマニズムは，圧迫された人間への同情，人間を非人間化する社会の悪に対する批判を形成しているが，しかし彼はそこからの出口をさししめすことができなかった。

（注）

1. ケラーの著作のテキストは，Gottfried Keller : Sämtliche Werke, Aufbau-Verlag Berlin (DDR) 1961 を用いた。翻訳には「世界文学大系79」筑摩書房，1964（メーリケ・ケラー篇）の堀内明氏訳ほかを参考にした。
2. マルクス＝エンゲルスからの引用は，Marx Engels Werke, Dietz Verlag Berlin (DDR) 1968 によった。「全集」とあるのはこれであり，巻数ページ数もこの全集のそれである。